

コンパス薬局瀬谷 スキルアップ勉強会

2018.9.27 田中

第86回 『ビムパット錠』

第一三共株式会社 小瀬様

参加者：味田村、松本、鈴木、佐藤（綾）、木元、遠藤、佐藤（里）、伊藤、田中

てんかんは、脳内の神経細胞の異常な電氣的興奮に伴って痙攣や意識障害などが発作的に起こる慢性疾患である。発作のタイプにより、てんかん全体の約6割を占める部分てんかんと約4割を占める全般てんかんに大別される。このうち、部分てんかんは脳の電気信号の異常が一部分に限定されているが、中には異常が二次的に脳全体に広がり、全般性の発作になる場合がある

【効能・効果】

てんかん患者の部分発作（二次性全般化発作を含む）

【用法・用量】

成人にはラコサミドとして1日100mgより投与を開始し、その後1週間以上の間隔をあけて増量し、維持用量を1日200mgとするが、いずれも1日2回に分けて経口投与する。なお、症状により1日400mgを超えない範囲で適宜増減するが、増量は1週間以上の間隔をあけて1日用量として100mg以下ずつ行うこと。

【禁忌】

本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者、重度の肝機能障害のある患者〔使用経験がなく、ラコサミドの血中濃度が上昇するおそれがある。〕

【副作用】

日本および中国での臨床試験では59.4%に副作用（臨床検査値異常を含む）が認められているため投与の際は十分に注意する。主な副作用としては、浮動性めまい（27.5%）、傾眠（10.4%）、頭痛、嘔吐（それぞれ5.9%）、悪心（5.5%）、白血球減少（3.4%）などがあり、重大なものは房室ブロック、徐脈、失神、中毒性表皮壊死融解症、皮膚粘膜眼症候群、薬剤性過敏症症候群、無顆粒球症が報告されている。

【作用機序】

ラコサミドは電位依存性ナトリウムチャネルの緩徐な不活性化を選択的に促進し、過興奮状態にある神経細胞膜を安定化させることによって抗けいれん作用を示すと考えられている。

【特徴】

ラコサミドは既存の抗てんかん薬とは異なり、電位依存性ナトリウムチャネルの緩徐な不活性化を選択的に促進することで、過興奮状態にある神経細胞膜を安定化させる薬剤である。また海外では、有用性以外にも臨床的に重要な薬物相互作用が認められないこと、薬物動態プロファイル、服薬継続率などの観点から多くの利点があると評価されている。

【使用上の注意】

腎機能障害患者（Ccr 30mL/min 以下の重症および末期腎機能障害）および軽度・中等度の肝機能障害患者（Child-Pugh 分類 A および B）では 1 日最高用量を 300mg までとし慎重な投与が必要になる。また血液透析を受けている患者には、1 日用量に加えて血液透析後に最大で 1 回用量の半量を追加投与するなど、臨機応変な対応が求められる。

【考察】

従来、部分発作に多く使われているカルバマゼピンと比較すると CYP による相互作用がないため、多剤併用中患者に使いやすく、たんぱく結合率も 15% 以下のため生理機能が低下している高齢者にも使いやすいと考えられる。2017 年 8 月 25 日より単剤療法でも使用可能になったため、多剤併用中の高齢者に対しての薬物治療に大きく貢献できると考えられる。

ただし、副作用に関しては浮動性めまいが一番多いので高齢者に使用する場合は浮動性めまいによる転倒には十分注意するように投薬口で指導すべき。

【質問事項】

Q ラコサミドの作用点とカルバマゼピンの作用点は同じと考えてよいか

A 同じ電位依存性ナトリウムチャネルに働くがラコサミドはカルバマゼピンと比べると緩徐な不活性化を選択的に促進する。

以上